

神戸女学院学舎の建築史学（Ⅰ）  
—計画されたキャンパス—

川 島 智 生

## Summary

### Architectural History of Kobe College School Buildings ( I ) —The Campuses Planned for Kobe College: Okuradani and Okadayama—

KAWASHIMA Tomoo

Kobe College Okadayama campus was built because the site of the Suwayama campus was too small. It is also due to the establishment of the Special Sector in 1919. Consequently Kobe College needed a suitable school building as an institution of higher education. During the period between the second half of Taisho and Showa pre-war days, many private schools began going into higher education. Campus-transfers first became popular in those days in Tokyo, Osaka and Kobe.

There was a plan for Kobe College to move to Okuradani campus before the Okadayama campus plan, and the basic design for the former was complete. Murphy, who was the designer in charge and was active in New York, designed a Spanish style, associating the climate of Setonaikai with that of the Mediterranean. This was the style adopted in the Okuradani campus.

Okadayama campus was designed by Voriez. He originally made two site plans. One plan had a large courtyard in the middle, with student dormitory in the north and an athletic field in the south. The other is the one actually adopted. It puts the school buildings to the south of dormitory and the athletic field. The latter plan was influenced by the arrangement of the house buildings and garden of the summer house which existed there before the campus. That villa was owned by Sakurai, who was the lord of Amagasaki-clan.

## 序

開学当初から西宮市岡田山という場所に、神戸女学院は「あった」のではない。「神戸」という校名にあらわされているように、本女学院は以前は神戸市諏訪山に所在した。そしてある時から、岡田山キャンパスが創出された。新しいキャンパス設置に対して、いったいいかなる理念がそこにはあったのか。キャンパス計画には、建物の配置や設計といった単に物理的な要素だけではなく、それらの施設をとおして、学生や教職員に対する学内での生活スタイルを提案することも含まれる。むしろ学園における、あるべき時の過ごし方への提言こそがより重要な要素でもある。そのような意味においてキャンパス計画とは新しい町をつくりだす行為と共通して、一種のユートピアづくりに似た様相を帯びる。その際に、全体の計画者たる建築家が学校というものをどのように捉えるのかが問われる。このようにキャンパス計画とは、きわめて精神的な側面が強いものであって、このことが具備されていなければ本来の意味でのキャンパス計画ではないだろう。

そのようなキャンパス計画が本格的になされた学校は、近代の日本においてもけっして数多くあったわけではない。生涯に二百<sup>1)</sup>を超える教育施設の設計をおこなったヴォーリズだったが、キャンパスを計画することから関わったものは、神戸女学院や関西学院、梨花女子専門学校など十指に満たない。すなわち単体の校舎の設計だけではなく、それらを繋ぐ空間をも含めた敷地全体が設計されるということは稀有な現象であったと位置づけられる。このことが現在、高く評価される神戸女学院キャンパスの建築イメージの成立に繋がっていった。

2003年、神戸女学院は現キャンパスである岡田山に移転して七十年の歳月を迎えた。七十年前の諏訪山から岡田山への移転をリアルタイムで体験した人を探すことは、今では不可能に近い。その時の記憶を、現在を生きる誰も持ち合わせてはいない。それどころか、岡田山移転時の経緯やそれ以前に計画されていたまぼろしの大蔵谷キャンパスについての事象もまた、本学教授であった和島芳男によって記述された論考をのぞけば<sup>2)</sup>、その多くは霧中にあるかのようである。一方で建設時の当事者や関係者が物故する一定の年限が経過しなければ、位置付け難い事実もある。

神戸女学院において、そのキャンパスはどのような様態を有するのか。本稿ではそのことを建築学の視点から解明することを目的とする。なぜ、建築学による視座が必要なのか。学校校舎のスタイルやキャンパスのありようは、学校のイメージを視覚的にもっとも分かり易く外部に伝える指標であると同時に、そこで学ぶ学生にとってはきわめて重要なファクターともいえる。にもかかわらず、その意味が論じられたことは少ない。一般的にわが国での女子高等教育施設はその学校関係者以外にはオープンではない傾向にある。よってその実態は、建築的には不明瞭な部分が多い。

神戸女学院についてこれまで建築学からのアプローチは、ヴォーリズの作品全体像の把握<sup>3)</sup>

が主であって、かならずしも学校建築史の立場による研究であったとは云い難い。学校建築史に関する先行研究に、官立の旧制高等教育機関を対象としたもの<sup>4)</sup>はあるが、女子高等教育機関を対象としたものについては管見の限りではない。

史料としては新たに発見できた神戸女学院図書館史料室所蔵の文献を用いた。また大蔵谷キャンパスがつくられるはずであった明石市東朝霧丘、朝霧山手町、朝霧台といった朝霧川右岸の段丘に現地調査をおこなった。なお本稿「計画されたキャンパス」とは「神戸女学院学舎の建築史学」の一編を構成するもので、続稿として岡田山キャンパスの中庭と建築の関係をはじめ、校舎のスタイル、細部の装飾デザイン、設計体制などの分析に主眼を置いた「岡田山キャンパスの建築的特質」、さらに明治大正期の神戸女学院について論じた「明治期・諏訪山キャンパスの成立と学舎の建築」という論文を筆者は予定している。

## I 神戸女学院の沿革と諏訪山キャンパス

### i) 神戸女学院大学の沿革

神戸女学院大学は明治8（1875）年に神戸で設立された寄宿学校からスタートし、明治12（1879）年より英和女学校、明治24（1891）年には高等科を設置し、明治27（1894）年に神戸女学院という校名が誕生する。正式な大学昇格は昭和23（1948）年であるが、明治36（1903）年に公布される専門学校令にもとづき明治42（1909）年に普通部、音楽部より構成される専門学校になる。大正8（1919）年には専門部を大学部と称する特例が認められ、大学令に準拠した大学を目指すことになる。ここに「計画されたキャンパス」の始点を見ることが出来る。

その設立はアメリカ組合教会派の海外支援ミッション組織であるアメリカンボードによる。明治以降日本で布教活動に訪れる米国プロテスタント各派は進出に当たって、ひとつの棲み分け<sup>5)</sup>をおこなっており、関西はアメリカ組合教会派が担当することになった。組合教会派が関連した学校としては神戸女学院、同志社、梅花の3校があった。そのなかで神戸女学院は外国人宣教師が直接設立した唯一の学校であって、女子高等教育を担う。

後に東京女子大学となる合同女子大学設立<sup>6)</sup>が大正3（1914）年より計画されるが、東京という遠隔地ゆえに神戸女学院は参加していない。次いで大正12（1923）年頃に神戸女学院を合同女子大学とする機運が高まるものの財政難ということで流れた。

### ii) 諏訪山キャンパス

ここでのキャンパスには煉瓦造による建築も一棟あったが、それ以外の7棟の建築は木造による洋館だった。その設計は建築の専門家ではないアメリカンボード宣教師、もしくは神戸女学院教員によって担われ<sup>7)</sup>ていた。明治期のキャンパスをみると、徐々に隣接地を買い求めて敷地を増設していくという方法に基づいたものであって、まとまってキャンパス計画がなされたわけではない。いわば計画することが困難であったことで、自然発生的に出来上がってしまったキャンパスと位置づけられる。

## II 大蔵谷キャンパス計画

岡田山移転以前に大蔵谷移転計画が胎動していた。新キャンパス計画の背景には女子大学設置計画があった。

### i) 大蔵山移転計画

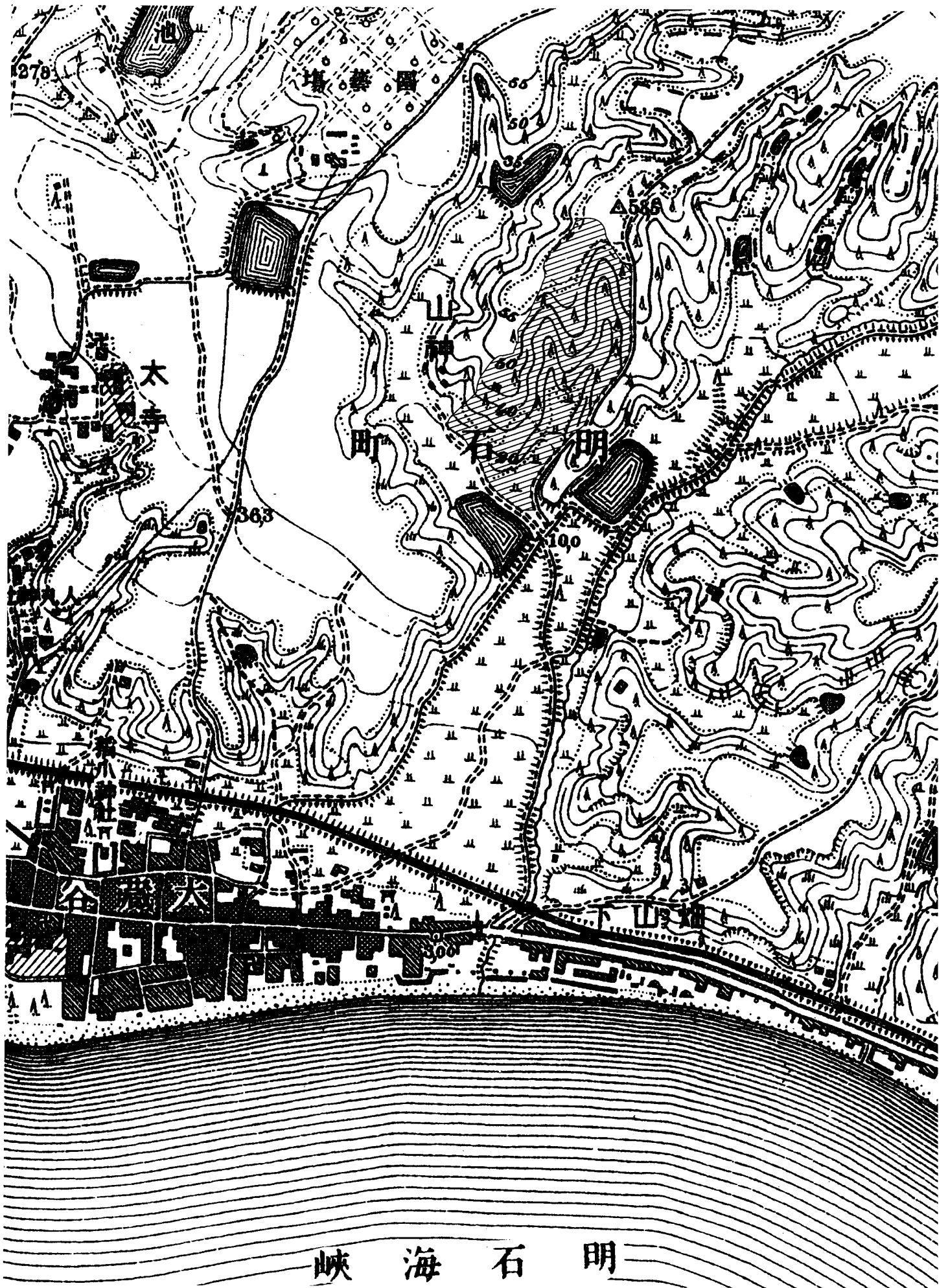
神戸女学院は大正10（1921）年の理事会にて大学部と高等女学部とを分離し、高等女学部は諏訪山に残り、大学部が郊外に移転することが決定した。このことは日本女子大学校、東京女子大学の設置に続き、西日本でのキリスト教による女子教育の拠点が目指されたことに他ならない。諏訪山キャンパスは周囲の急速な市街地化にあって、隣接地に人家が密集し、敷地拡充の余地<sup>8)</sup>がないという状況にあった。

大正10（1921）年には神戸女学院同窓会の手によって、明石市大蔵谷に大学部の敷地が購入されている。その場所は現在の明石市東朝霧丘、朝霧山手町、朝霧台という町名に該当する。現況は戸建住宅からなる住宅街となる。傾斜地ゆえに明石海峡が南側に望める。その様子は神戸女学院同窓会誌『めぐみ』<sup>9)</sup>には次のように記された。

大蔵谷は神戸市へ十一里、南に明石海峡を隔て、淡路島を望む小高い丘の一帯で、池あり、林あり、谷あり、草原あり、実に落ち着いた気持ちのよい美しい所です。

敷地購入時の現地の景観を表す写真が四葉<sup>10)</sup>（写真1の(一)・(二)・(三)・(四)を参照）、絵葉書として残されている。いずれもの写真にも池が写っている。敷地内には3つの池があったようだ。ひとつには「黙想の池」と名づけられており、このように水景を愉しむことが考えられていたことが読み取れる。小高い丘陵の地形は後で詳しく見る岡田山と共通する。

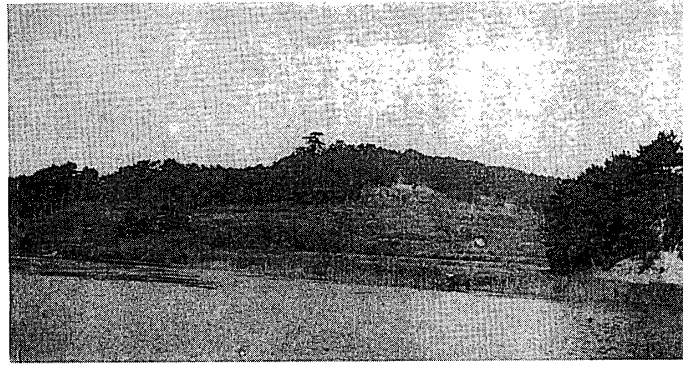
ではなぜ、この敷地が選択されたのか。筆者は次の三つの要因があったものと考えている。第一は敷地予定地に近接して、大正6（1917）年に兵庫と明石を結ぶ兵庫電気軌道（現、山陽電鉄）が開通して大蔵谷駅が設置され、通学の利便性の確保が保障されたことである。その背景には神戸は第一次世界大戦中に未曾有の急成長を遂げていて、この時期経済力では東京、大阪に次ぐわが国第三の都市になっていた。その結果都市化の進展が著しく、東西の方向に市街地化が進展し、その勢いは須磨を越え明石の方向に向かっていた。つまりこの土地が十分に将来性のあるものと予測されていた。第二は南側に海がひろがる丘という優れたロケーションに注目されたことである。そのことは須磨と明石の間は明治前期より風光明媚ということで、塩屋や舞子などを中心として外国人たちの海浜別荘地帯となっていたことからもうかがえる。その丘は既にみたように池や林があって自然を堪能できる敷地であった。第三は神戸女学院同窓会幹部が塩屋に居住していたことや明石郡長が神戸女学院と繋がりがあったことによる。そのような背景が重なり、明石と須磨の間に位置する大蔵谷がキャンパス予定地として浮上していた。ただ神戸と西宮の間の場所でもこの時期に土地の探索がなされるが、適地は見つからなかったようだ。



66 図1 大蔵谷の地形図 (1913年、地図名「舞子」2万分の1を1万分の1に拡大)

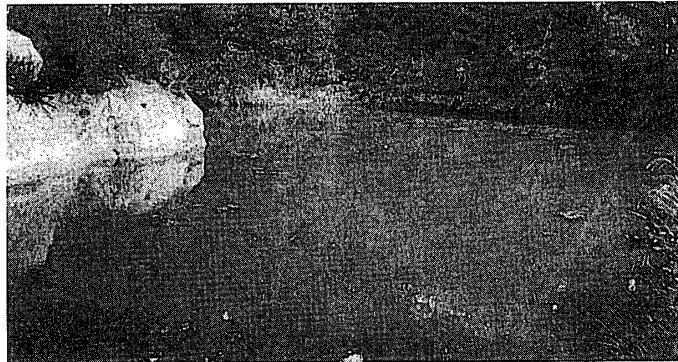
備考：網部分は大蔵谷キャンパスの位置を示す

明石市大倉谷  
神戸女学院大学部敷地(二)  
全景



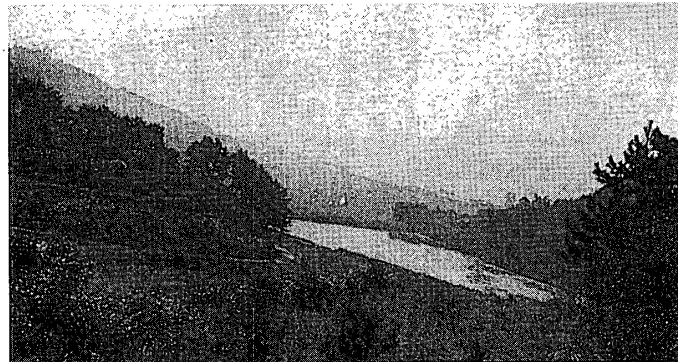
New Kobe College Site, Okuradani, Akashi  
(1) As Seen from the Southern Approach

明石市大倉谷  
神戸女学院大学部敷地(二)  
黙想の池



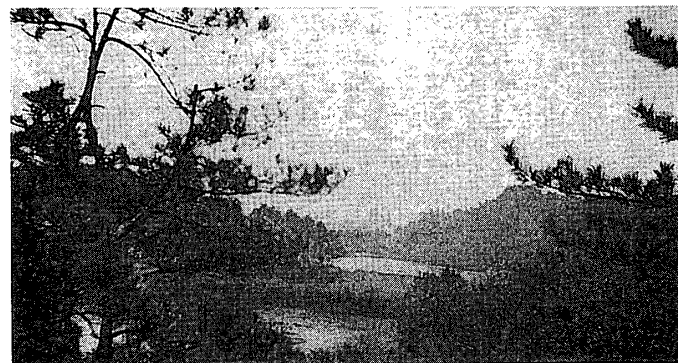
New Kobe College Site, Okuradani, Akashi  
(2) The Pond in the Ravine

明石市大倉谷  
神戸女学院大学部敷地(三)  
学生の舟遊すべき池を  
隔て、微かに淡路島を望む



New Kobe College Site, Okuradani, Akashi  
(3) View from the Site to the Island of Awaji

明石市大倉谷  
神戸女学院大学部敷地(四)  
二つの池を隔て、  
淡路島を望む



New Kobe College Site, Okuradani, Akashi  
(4) Upper View from the Site to Awaji

写真1 大蔵谷キャンパス敷地の絵葉書



写真2 マーフィの顔写真

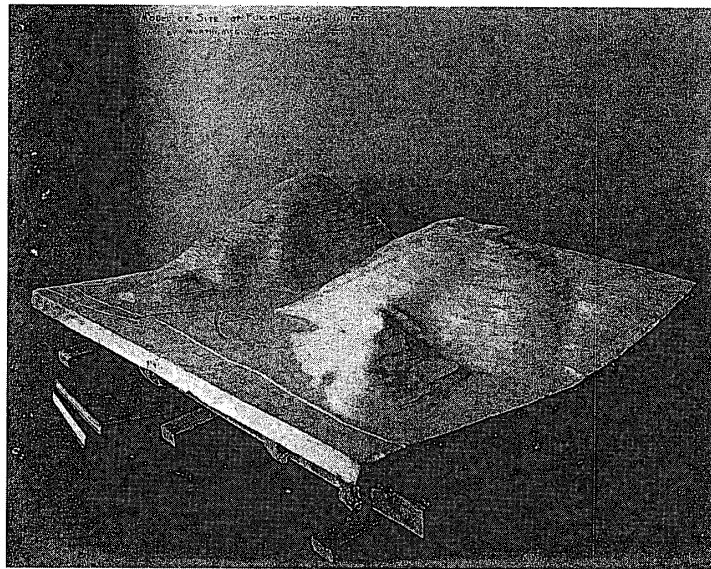


写真3 Fukien（福建）キリスト教大学・敷地模型写真

大蔵谷計画の敷地選定に際しても、念入りの調査がなされていた。大蔵谷駅の西側二ヶ所と東側二ヶ所、さらに東側の計五ヶ所が候補地となる。その決定に際し、名前は判明しないが、おそらくは日本人であろう建築技師<sup>11)</sup>に各土地の視察をおこなわせ、その報告を踏まえて東側の高台の土地に決定していた。

ここで求められた条件<sup>12)</sup>とは大学部、音楽部の学生700名を収容し、本館・寄宿舍・諸運動場・教職員住宅・1000人収容の講堂が求められた。大正17（1928）年までに移転が完了する予定だった。工費は百余万円と計上されていた。

## ii) 外国人建築家マーフィによる設計

設計はニューヨークと上海に拠点を置くマーフィ・マクギル・アンド・ハムリン建築事務所<sup>13)</sup>が担当する。建築家ヘンリー・キラム・マーフィが主催する民間建築事務所であり、上海にも事務所を設け、燕京大学<sup>14)</sup>女子部の倶楽部ハウスの設計（図2）や、金陵キリスト教大学<sup>15)</sup>やFukienキリスト教大学<sup>16)</sup>のキャンパス計画（写真3）、さらにはフィリピンの大学<sup>17)</sup>を担当



するなど東アジア一円を守備範囲とする大学建築の設計者として名を馳せた建築家だった。なぜ、マーフィの建築事務所が依頼を受けたのかは定かではないが、マーフィは大正3（1914）年にマーフィ・アンド・ダナー<sup>18)</sup>建築事務所の共同主催者として、立教学院の本館・図書館・礼拝堂・寄宿舍などからなる池袋キャンパスの基本設計（図3）<sup>19)</sup>をおこなっていた。後に詳しくみるが、近代日本のキャンパス移転史上、立教大学がもっとも早い時期におこなわれる郊外移転だった。その新キャンパスを計画したひとりが、マーフィだった。このことからはこの時期、日本においても信頼に値する建築家としての地位を築いていたものと考えられる。

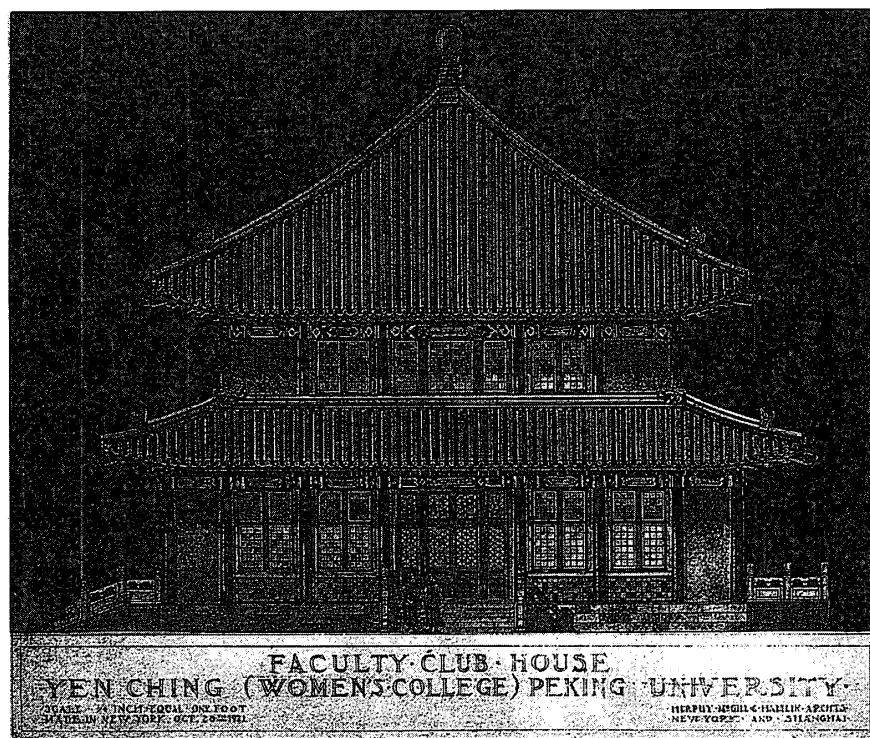


図2 燕京大学女子部の倶楽部ハウスの正面図（1921年10月28日）

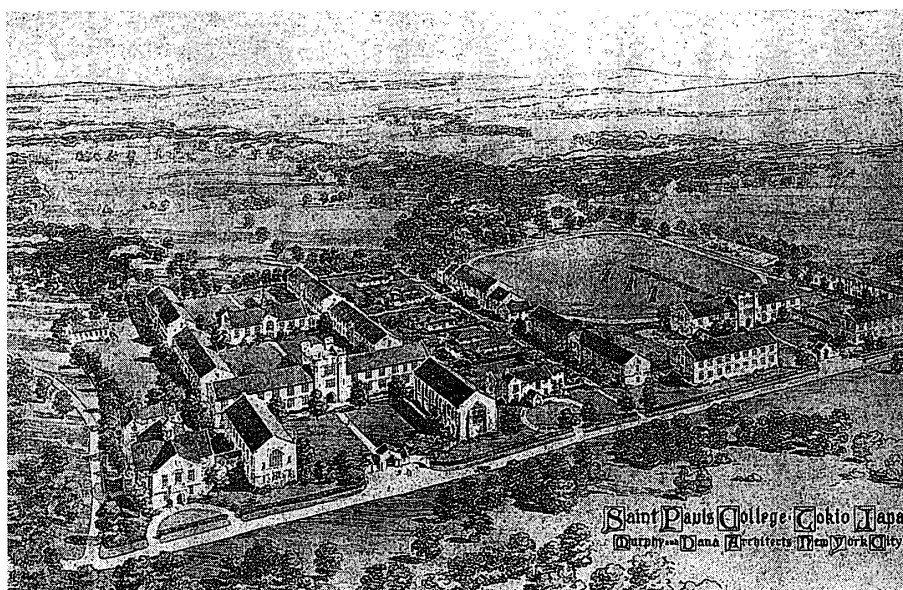


図3 マーフィが関わった立教大学池袋キャンパス鳥瞰図（1914年）



図4 大蔵谷キャンパスのスケッチ (1922年8月)

現時点で確認される設計資料<sup>20)</sup>としては、配置図が2枚、スケッチ(図4)が2枚、完成予想外観図(図5、6、7)が3枚、の計7枚がある。配置図を分析すると、大正11(1922)年9月と明記されたもの(図8)と、大正12(1923)年8月20日と記入されたもの(図9)がある。マーフィとハムリンは大正11(1922)年7月に大蔵谷を訪れ、その成果として提出されたものが前者であり、その内容がより吟味された結果、後者が作製される。わずか二ヶ月間で図8の基本計画がつくられる。さらに一年間費やして内容が吟味され、図9のプランに落ちつく。このふたつの配置図を比較すると、前者にあった野外劇場が、後者では池に変更されるなど一部に差異がみられるものの、ほぼ共通する内容になっていた。

実際に建設が遂行されなかった最大の理由は、建設費用のための募金が集まらなかったことによるが、昭和2(1927)年までは、この計画は存続する。その間に関東大震災があって、耐震という観点<sup>21)</sup>でそれ以前に計画されたマーフィの計画案は変更を余儀なくされる。ちなみに大正7(1918)年に完成していた立教大学の本館をはじめ多くの建築は新築間もない時期にもかかわらず、塔屋や妻壁が瓦解<sup>22)</sup>しており、このような被災した事態の内容を神戸女学院側でも知り得たものと考えられる。後に岡田山を選定する際に、地震に強い地盤かどうかを綿密に調査していることからそのことはうかがえる。おそらくはそのようなこともあって、マーフィの設計する建築は耐震的ではないと判断された可能性もある。さらにこの間にマーフィ・マクギル・アンド・ハムリン建築事務所はマーフィーとハムリンの対立によって解散していた。マーフィとハムリンは別れてそれぞれの建築事務所を設け、ともに大蔵谷の新キャンパスの設計を受けようとするが、大正15(1926)年には計画内容が、仮設の校舎建設に変更され、この計画は事実上断ち切られてしまう。その結果、マーフィのキャンパス計画は永遠に幻のものになった。

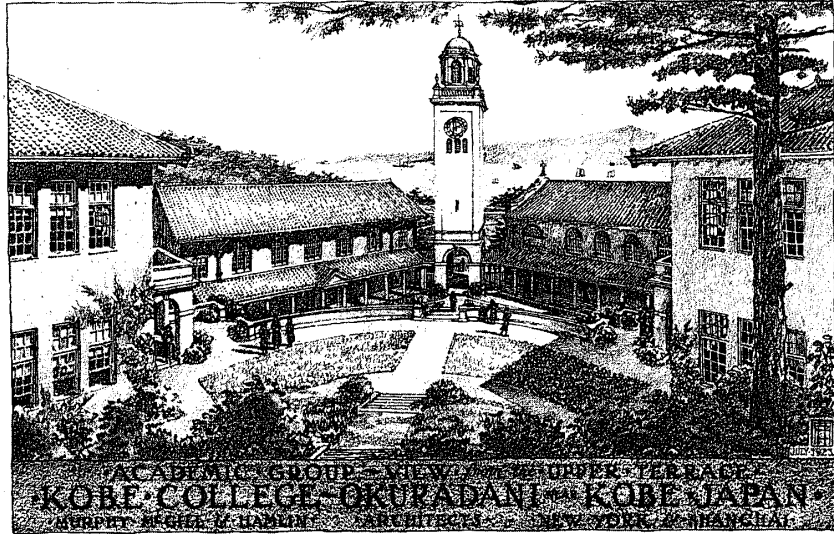


図5 大蔵谷キャンパス完成予想外観図・アカデミックグループ・見おろし  
 (1923年7月)

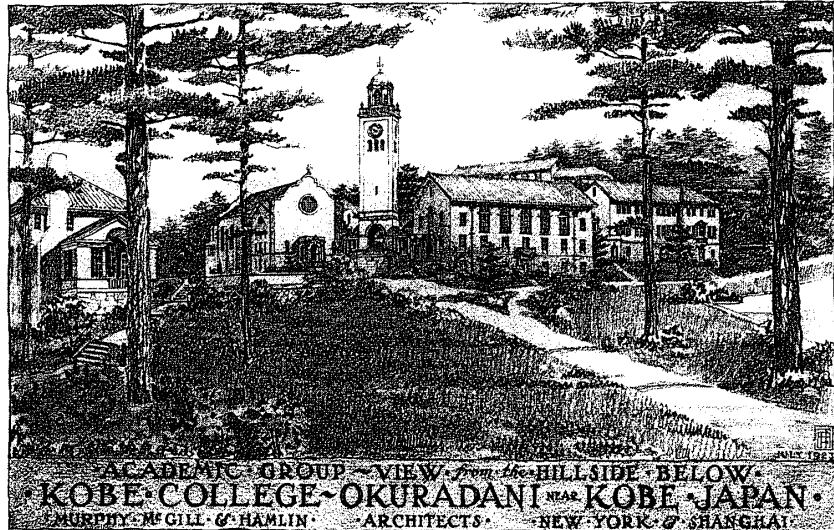


図6 大蔵谷キャンパス・完成予想外観図・アカデミックグループ・見上げ  
 (1923年7月)



図7 大蔵谷キャンパス完成予想外観図・ドミトリイグループ・見上げ  
 (1923年7月)

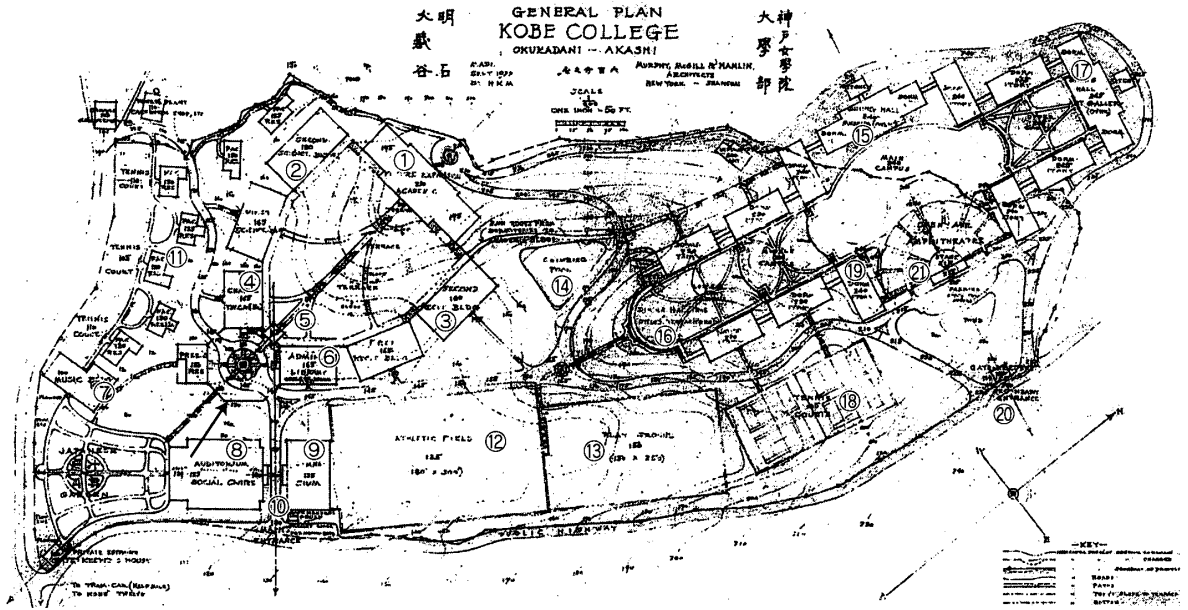


図8 大蔵谷キャンパス配置図1 (1922年9月)

図中の矢印は図4の見え方を示す

- |            |            |              |            |
|------------|------------|--------------|------------|
| ①総務館       | ⑦音楽館       | ⑬運動場         | ⑲学生寄宿寮     |
| ②理学部       | ⑧講堂と社交館    | ⑭水泳場         | ⑳学生用エントランス |
| ③文学部       | ⑨体育館       | ⑮食堂とミュージアム   | ㉑野外劇場      |
| ④チャペルとYWCA | ⑩メインエントランス | ⑯食堂とテラス      |            |
| ⑤塔         | ⑪教職員住宅     | ⑰食堂とアートギャラリー |            |
| ⑥総務館と図書館   | ⑫競技場       | ⑱テニスコート      |            |

KOBE COLLEGE - OKURADANI NEAR KOBE - JAPAN.  
~ GENERAL PLAN ~

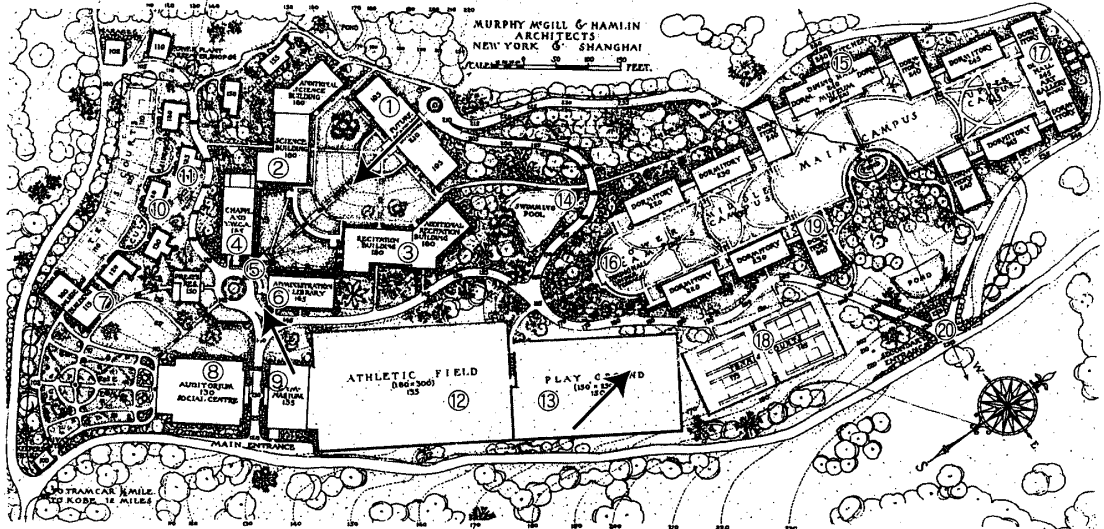


図9 大蔵谷キャンパス配置図2 (1923年8月20日)

図中の矢印1は図5、矢印2は図6、矢印3は図7の見え方をそれぞれ示す

- |            |            |            |              |
|------------|------------|------------|--------------|
| ①総務館       | ⑥総務館と図書館   | ⑩教職員住宅     | ⑯食堂とテラス      |
| ②理学館       | ⑦音楽館       | ⑫競技場       | ⑰食堂とアートギャラリー |
| ③文学館       | ⑧講堂と社交館    | ⑬運動場       | ⑱学生寄宿寮       |
| ④チャペルとYWCA | ⑨体育館       | ⑭水泳場       | ⑳学生用エントランス   |
| ⑤塔         | ⑪メインエントランス | ⑮食堂とミュージアム |              |

### iii) キャンパス計画内容

#### 配置計画

大正2（1913）年の地形図（図1）によれば、当該敷地は南側に突出した段丘になっており、最高高さの標高は58.5メートルとある。ふたつの尾根とひとつの谷から構成され、南側に二つの池が、北側にひとつの池の、計3つの池があった。配置計画の特徴は起伏に富んだ傾斜地という地形の特性を生かしたもので、谷を挟んで南西側をアカデミック・グループ、すなわち学舎として、一方、北東側をドミトリー・グループ、すなわち学生寄宿寮と区分した。前者は南北の方向に走る尾根をほぼ軸線として、左右に校舎が配置された。その中心に塔があり、東側に総務館兼図書館、西側に礼拝堂兼キリスト教女子青年会館、続き丘側に向かって東側に文学館、西側に理学館という配置がなされた。また敷地へのゲート部には体育館と講堂がそれぞれ配置され、音楽館は南端に設けられた。さらに日本庭園がメインエントランスの手前に設置されたことも興味深い。ここを訪れる人々を日本庭園がむかえるという導入法からは視覚的記号としての「日本」が意識されていたことがうかがえる。このような文学館と理学館が中庭を挟んで対置される方法や、音楽館を丘の下に持ってくる手法、日本庭園の設置などは後の岡田山でのヴォーリズ案に共通する。そのことから類推すれば、おそらくはヴォーリズのキャンパス計画に影響を与えたものと考えられるだろう。

またランドマークとなるようなタワーの設置について、マーフィによる次のような言説が残っている。

高台の丘の上に建てられる女学院の建物は、インド洋をとおって神戸にやってくる船の目にとまるだろう<sup>23)</sup>。

このようにみられることを十分に意識したキャンパス計画がなされていたことが読みとれる。

#### 建築スタイル

キャンパスの景観については、前述したスケッチや3枚の完成予想外観図からある程度その内実を読み取ることができる。判明することはその建築スタイルは共通して瓦屋根が載るイタリア・ビラ風の意匠による。外壁はクリーム色のスタッコ塗り、屋根には日本瓦もしくは赤瓦で葺くという仕様が決まっていた。校舎側では塔屋が特徴的で、礼拝堂はバロック風妻部を有し、開口上部はアーチ状となる。マーフィは設計に当たってのコンセプトを次のように記した。

敷地の横長な地形と樹木の美とを生かすため地内各所の等高線を修正して左右均斉のとれた緩勾配を整え、建物は瀬戸内海の風光と調和すべき南欧様式をもって統一し<sup>24)</sup>

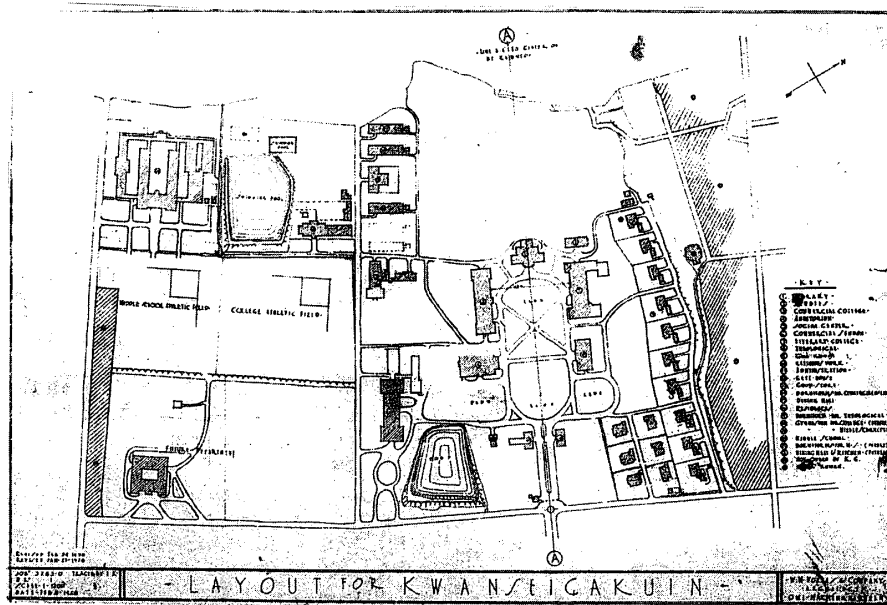


図10 関西学院配置図 (1928年)

ここに「南欧様式」がふさわしいものとされていることは、後のヴォーリズによるスパニッシュ・ミッションのスタイルと共通する。マーフィによるこのキャンパスは完成すれば、日本で最初のスパニッシュ・ミッションに影響を受けた建築になるはずであった。さらに興味深いことに、当時デフォレストとマーフィが交した書簡からは、南欧様式ではなく、中国様式を織り交ぜた日本風<sup>25)</sup>の建築スタイルのものが最初提案されていたことが判明する。その根拠をマーフィは「中国の大学では中国様式の建築が好まれたので、新校舎には日本様式を取り入れることを提案した」<sup>26)</sup>と記した。このような「日本様式」に対して、日本人教員の間から反発が出る。その結果南欧様式が採用されることになる。その後、再度アメリカの財団から日本建築の様式を採用する要望が出されることになる。すなわち、日本人と外国人との間に、建築スタイルに対する意識に大きな違いが表れていた。なお、マーフィは立教大学では煉瓦が外壁に表し仕上げとなった、ゴシックに影響を受けたスタイルのものを提示していたことを記しておく。

構造的な見地からこれら一群の建築をみれば、壁は煉瓦造で立ち上がり、屋根小屋組みは木造で計画されていたものと推測できる。先行する立教大学の事例を考えれば、床スラブだけが鉄筋コンクリート造でつくられる予定であった可能性がある。鉄筋コンクリート造が計画されていたことは図7のドミトリイ部分のダイニングホールの階上がフラットルーフのテラスとして設計されていたことからもうかがえる。

#### iv) 1920年代のキャンパス移転ブーム

神戸女学院のキャンパス移転計画は同時期の他大学のものと比較するとどのような位相にあるのだろうか。これまでの大学キャンパスの歴史とは、市街地から郊外への一方通行の移転であって、それは近代日本の都市における市街地の拡大の歴史とも重なり合う。明治以降キャンパス移転が集中する時期はおよそ二回あった。ひとつは大正後期から昭和初期、もうひとつは

昭和50年代以降である。神戸女学院のキャンパス移転については、第一の時期に該当する。

第一の時期のキャンパス移転の背景には、大正7（1918）年の大学令の公布に伴って私立大学が認可されたことが関連する。この時期のキャンパス移転ブームを分析すれば、二つに分類できる。ひとつは大学令交付直後の時期になされたもの、もうひとつは関東大震災以降に主に東京でみられたものである。

最初のもは私立学校が中心で、大正8（1919）年の立教大学の池袋キャンパスへの移転が、もっとも早い。大学昇格については大正9（1920）年の慶応・早稲田を嚆矢として、明治・中央・日本・國學院・法政・同志社と8校が正式に大学となり、その過半はそれまでとは異なった別の場所にキャンパスを新設する。関西では大正11（1920）年に大学となる関西大学を嚆矢とし、昭和4（1929）年の関西学院大学が上ヶ原に、昭和8（1933）年の神戸商大（現、神戸大学）が六甲に、昭和6（1931）年の神戸高等商業（現、神戸商科大学）が垂水に、昭和7（1932）年の大阪商科大学（現、大阪市立大学）が杉本町、昭和5（1930）年に京都高等工芸学校（現、京都工芸繊維大学）が松ヶ崎と、昭和初期にほぼ一斉に郊外移転がおこなわれていく。東京での事例は関東大震災による被災が深く関連しており、昭和2（1927）年に国立に移転する一橋大学（旧東京商科大学）や昭和4（1929）年に大岡山に移転する東京工業大学に典型例をみるることができる。このようにキャンパス移転とはこの時期東京、大阪、神戸などでは顕著にみられる現象だった。神戸女学院移転計画とはそのような流れの中に、位置づけることができる。

### Ⅲ 岡田山キャンパスの成立過程

#### ⅰ) 選ばれた岡田山

岡田山とは尼崎藩の御林山であり、明治以降には後述する桜井家の別邸が建設される。神戸女学院が購入する昭和初期の頃にはほとんどの土地は武庫郡大社村広田に含まれ、東端と北端の一部が甲東村に所在した。

大蔵谷計画は一旦中断されたあと、敷地設定をめぐって議論が交わされた結果、大蔵谷は大阪から距離が遠く学生通学に不便があるということで、敷地の設定が再考される。その時期阪神急行電鉄（以下阪急電鉄と称す）今津線門戸厄神駅西北の岡田山が竹中工務店社主の竹中藤右衛門と河鯛節の仲介<sup>27)</sup>によって、大蔵谷の敷地と交換されることになり、昭和5（1930）年3月には岡田山に敷地を得た。

またその背景には阪急電鉄経営者の小林一三による今津線振興策も関連する。今津線は大正10（1921）年に西宝線という名称で開通したものの当時は住宅地開発が始まったばかりで乗客数は少なく、採算性において困難が生じ、乗客確保のために学校を誘致する必要があった。そのために当初西宮北口駅からスクールバスが運行されるなど協力の体制が採られることになる。今津線沿いにある関西学院は神戸女学院よりも早い時期の昭和4（1929）年に誘致されていた。昭和2（1927）年に移転が決議され、移転の財源は神戸市内原田にあった旧校地を阪急電鉄へと売却した費用で新校地と建設費を賄っていた。設計者は神戸女学院と同じくヴォーリズだった。



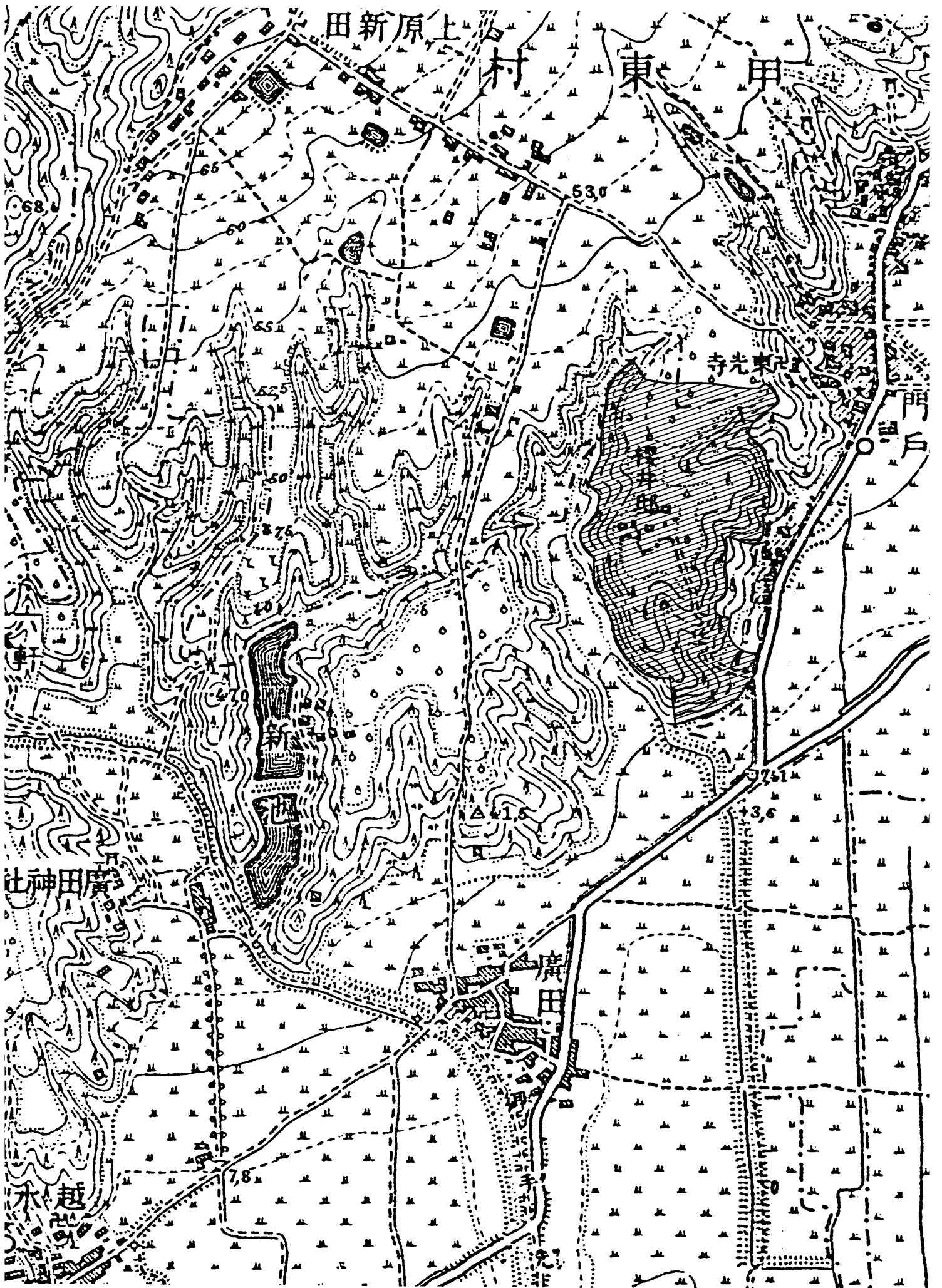


図11 神戸女学院以前の岡田山付近の地形図（1909年、大日本帝国陸地測量部作製の地形図1万分の1）

備考：縦線のハッチ部分は現在の岡田山キャンパスの位置を示す





写真4 神戸女学院が来る以前の岡田山



写真5 神戸女学院が来る以前の岡田山正門入口

## ii) 変更された設計者—ヴォーリズの採択

設計者についても校舎予定地が岡田山に移った時点で、マーフィからヴォーリズに変更になる。その理由<sup>28)</sup>は第一としてヴォーリズが大正3（1914）年に家斎館を設計していた点。第二としてヴォーリズが近江八幡を拠点とするために、設計の打合せに便利な点。第三としてヴォーリズが日本の施工方法を心得ていること、の3点があげられた。この時期にはヴォーリズは数多くのミッションスクール設計の実績があり、日本で建築事務所を開業して25年の歳月が経過していた。くわえてヴォーリズの妻、一柳満喜子が神戸女学院音楽部の卒業生であったことも設計者に選ばれる際に有利に働いたものと推察される。マーフィはアメリカを拠点とするために日本で活動するヴォーリズに比較して、設計の打ち合わせに不便ということも関連した。

ヴォーリズに対し神戸女学院側から正式に設計依頼がなされたのは昭和4（1929）年4月であり、以降正確な敷地の実測がなされ、基本設計がおこなわれていったものと推測できる。ただ、配置計画については略スケッチ（図12）<sup>29)</sup>が昭和3（1928）年12月までにはつくりあげら

れており、それを清書した配置図（図13）<sup>30)</sup>が昭和3（1928）年12月28日にはできあがっていたことがわかる。

### iii) 設計の過程

計画のプロセスについてはヴォーリズとデフォレストとの間に交された多くの書簡<sup>31)</sup>から、その内容をうかがうことができる。その書簡からはその際にヴォーリズ建築事務所に様々な注文が出されたことが判明する。設計にあたり神戸女学院側では昭和4年12月に学院長デフォレストを中心とする建築委員会が組織され、その下に10の小委員会が設置され、各建築物の必要な内容を提示させた。そのことを受けて、昭和5（1930）年7月から本格的に設計が開始される。以後ヴォーリズを呼び委員会が開催される。確認されるものに、昭和5（1930）年7月16日、同年11月1日の2回があった。その直後に寄宿舎用地として隣接する土地が入手され、同年11月には敷地内の道路計画や計17の建築物の基本設計ができ、昭和6（1931）年5月に配置計画（図14）が完成する。

## IV 岡田山キャンパスの配置計画

### i) 最初のレイアウトプラン

先述したように岡田山の最初にスケッチがヴォーリズ自身のスケッチ（図12）によるものがある。昭和3（1928）年12月28日と記されている。縮尺は1/800とあり、現在のものと比べ大きく異なる。現在の中高部（旧高等女学校）から理学館を結ぶ線を長軸とし、現在のキャンパス計画とは大きく異なる。神戸女学院のキャンパス計画のうち、もっとも特徴的な中庭についてもその面積は約3倍ほど広がった。配置された建物の数や内容は現在のものとは、相違点はあるものの、基本的にはここに祖形を求めることができる。

このようなプランが確定していく過程をみると、ヴォーリズ建築事務所を継承した一粒社に残る手書きのスケッチ（図12）が、現在のものに決定されるまでに試行されたプランのひとつとみることができる。このキャンパス計画は敷地の中央に巨大な中庭を設定し、そこに面して各施設が配置されるといった案で、現在のものとは大きく異なる。

このレイアウト図面（図13）と現在のレイアウト図面（図14）を重ね合わせてみると、敷地全体の大きさに大きな相違がみられる。すなわち、最初にレイアウトされた計画ははまだ敷地が確定されていないなかでの基本構想的な配置図だったといえる。おそらくは桜井子爵の所有した敷地内だけで計画が立てられた可能性も考えられる。実際に昭和5年3月7日に約2万坪を桜井子爵より購入し、同年6月に岡田山の北側の大社村広田の5,600余坪と甲東村の8400坪が購入され、合計3万4000坪になる。現在学生寮になっている敷地がまだ買い足されていない時期のものであったと考えることもできる。

### ii) 実現された配置と桜井子爵邸との関連

実施された配置計画とは、南側をアカデミック・グループ、すなわち学舎に、北側をドミトリイ・グループ、すなわち学生寄宿寮と区分した。庭園のなかに建物が配され、日本庭園も設置された。実際に図1と図11を比較してみると、約2万坪という敷地面積においても、南面に

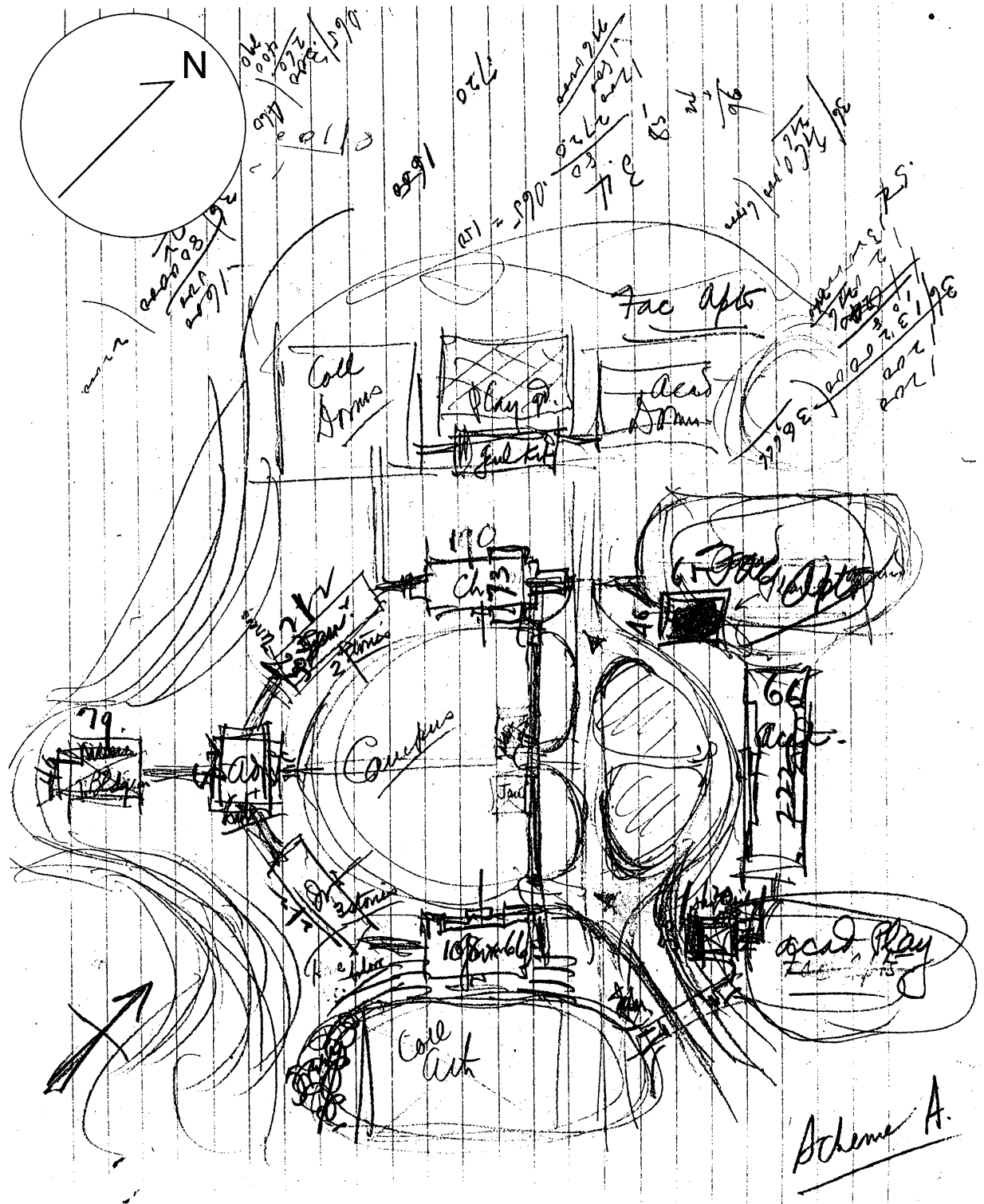


図12 ヴォーリス自筆の岡田山キャンパス配置図のスケッチ (1928年12月以前)  
(原図に方位を記入)

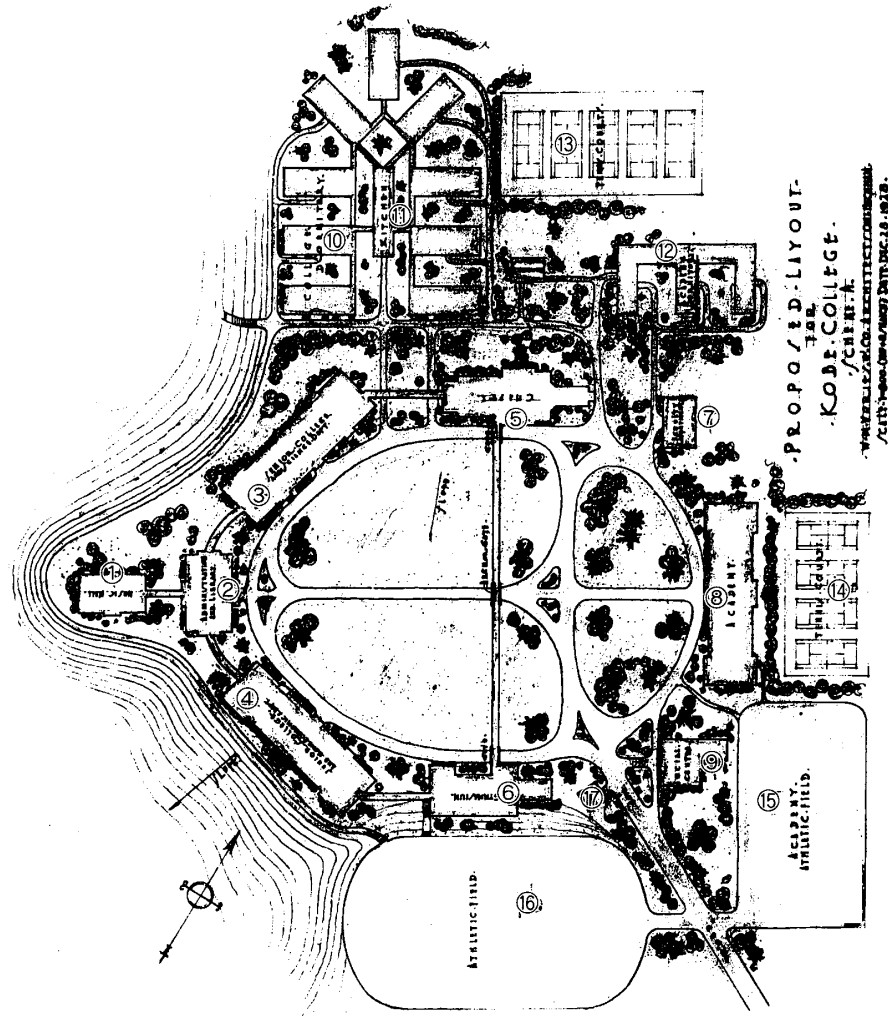


図13 岡田山最初のキャンパス配置図（1928年12月28日）

- |          |         |           |       |
|----------|---------|-----------|-------|
| ①音楽館     | ⑥体育館    | ⑪食堂       | ⑬運動場  |
| ②総務館兼図書館 | ⑦教員宿舎   | ⑫高等女学部寄宿舍 | ⑭岡田神社 |
| ③理学館     | ⑧高等女学部  | ⑬テニスコート   |       |
| ④文学館     | ⑨社交館    | ⑭テニスコート   |       |
| ⑤礼拝堂     | ⑩専門部寄宿舍 | ⑮高等女学部運動場 |       |

突出した段丘や東側に低地を有する点など、地形的にも多くの点で共通点が指摘できる。

実現された配置計画は岡田山の最上部の台地状の部分を中心にキャンパスに充てている。その特徴は中庭を配して、南に図書館、北に総務館・講堂・礼拝堂、東に文学館、西に理学館を配置し、いずれもが中庭側に正面を有した。このような中庭を中心に据えたプランニングはクアドラングル<sup>31)</sup>と呼ばれる手法であって、それらの建物は回廊で連結される。くわえて南側丘の下には音楽館、北側にはグラウンドと接してギムナジウムという室内雨天体操場が、高等部、教員住宅、学生寮と続く。このような建物の配置法は最初のプランでは表われていない。ヴォーリズのキャンパス計画ではしばしば比較の対象とされる関西学院でもこのようなプランニングは用いられておらず、ひとり神戸女学院だけに用いられたものだった。このような計画案成立の背景は米国のキャンパス計画がひとつのモデルとしてあったものとも考えることも可能だ。その関連性については史料的制約もあって現時点では判明しないが、今後その解明が待たれる。

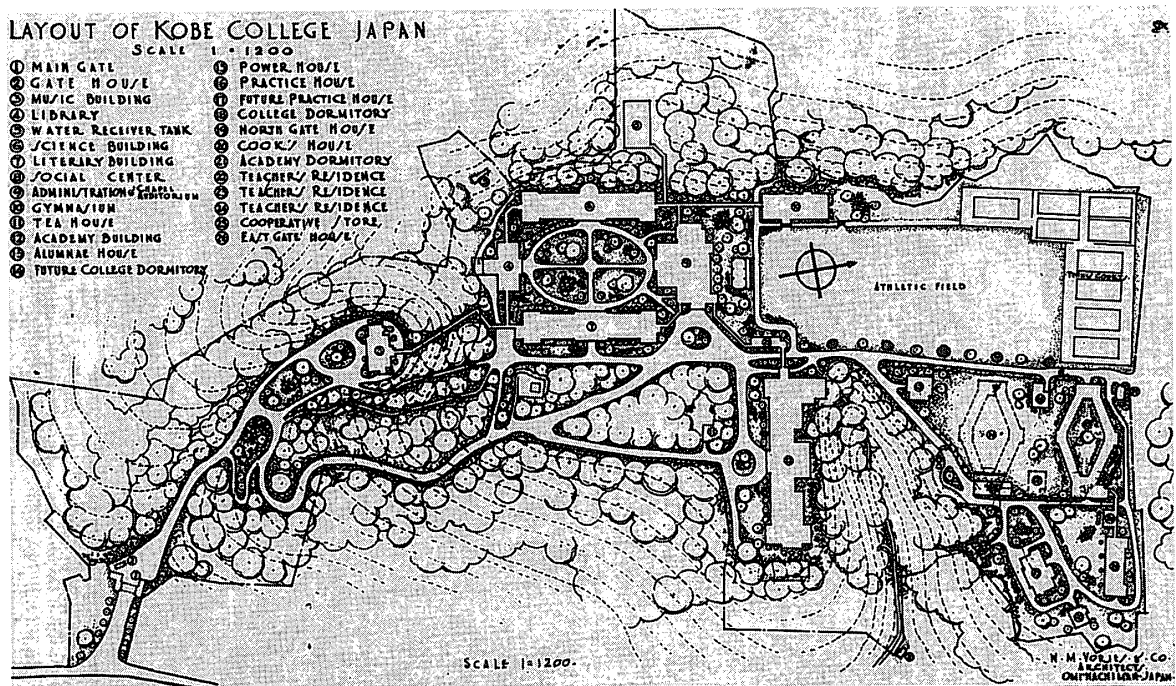


図14 実現された岡田山のキャンパス配置図（1930年11月）

岡田山は最上部がほぼ平坦な地形であったことが、明治42（1909）年の二万分の一の地形図（図11）から読み取れる。神戸女学院が建設される以前の岡田山の様態をみると、明治5（1872）年以降に桜井家の別荘が建設<sup>32）</sup>される。桜井家とは旧尼崎藩主であり、明治以降は子爵となり東京に移住する。ただしこの地、大社村広田は周囲の村落が天領になった後も尼崎領にとどまり、明治維新の時点まで桜井家の所領であったことを考えれば、岡田山が桜井家の別邸地となったことは容易に理解される。

では、桜井家別邸は台地の南端にどのように配されていたのだろうか。先述の和島芳男<sup>33）</sup>によれば、住宅3棟、この3つを連結した廊下、女中部屋1棟、膳所1棟、土蔵1棟、とある。その配置については、神戸女学院に関するヴォーリズ建築事務所で作成した竣工時の図面集<sup>34）</sup>のなかに見出せ、具体的には破線で囲われた部分がそれらの建物であったと考えることができる（図15）。

桜井家別邸外観を写した写真が2葉残っており、平屋建で一つは総務館側（写真6）、もうひとつは文学館側（写真7）にあって、それぞれ直角に接していた。この2葉の写真からわかることは二棟ともに屋根の下部が下屋状になることで、二段の構成を示し、格式の高さを表わしていた。とりわけ写真7の主屋の屋根の両端が半切妻のはかま腰屋根となっている点が特徴といえる。

ヴォーリズはこのような桜井家の別荘建築が庭園と一体となって醸成していたランドスケープについて、次のように記した。

この美しい景色よりうけた利益を挙げたいと思う。即ちこの土地の天然美と、この眺望の前所有者であった某名門によって植え付けられた多くの樹木の由緒等が、私共の仕事に特

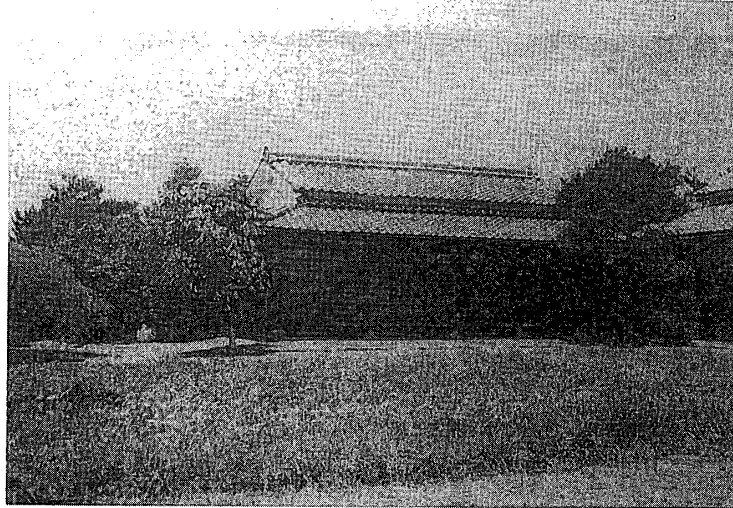


写真6 桜井邸離れ

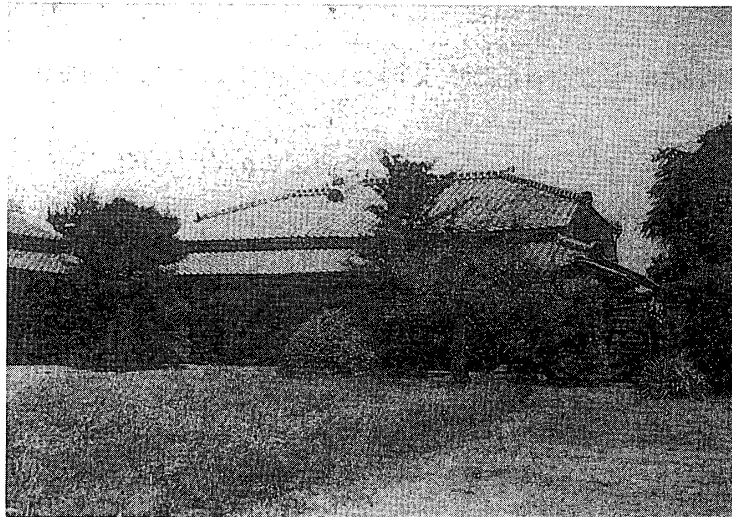


写真7 桜井邸主屋



写真8 桜井邸正門

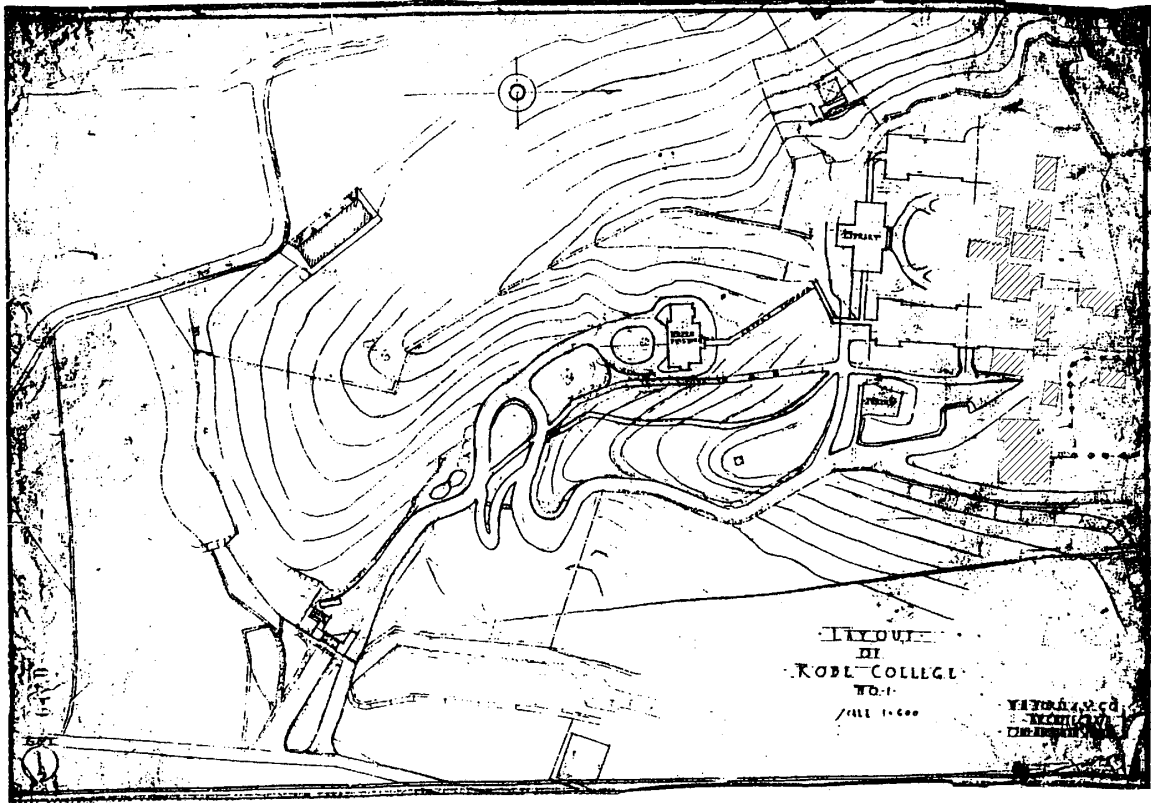


図15 桜井邸の跡を示す配置図

中庭部分の破線で囲まれた箇所が、桜井邸の施設の一群と考えられる。筆者が加筆して作製。

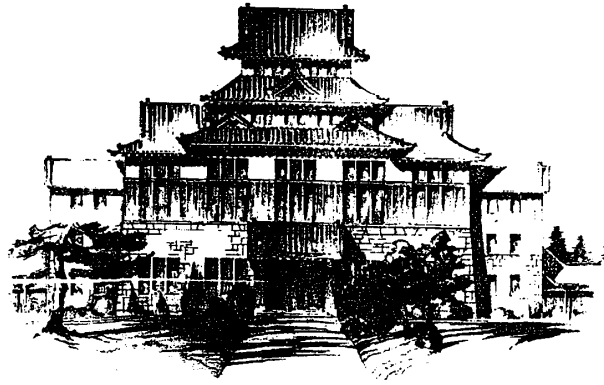
別なる興味を増し加えたのである<sup>35)</sup>。

現在みられる中庭・文学館側の庭園の石組と一部の樹木は桜井家時代のものと伝えられており、このクアドラングルの場所の設定はすでに存在した桜井家の庭園の位置に左右されることになる。前述のヴォーリズの言説は、このことを物語る。実際に、現建築群に目をむけると中庭の4つの建物は渡り廊下で連結されており、そこから枝分れした渡り廊下によって音楽館にも社交館にも繋がっている。このような手法は大規模な社寺や御殿などにおいても用いられる手法であった。また、現在の門からはじまる尾根づたいのアプローチも、図11と見比べるとほぼそのまま継承されていることがわかる。

### iii) 採用されたスパニッシュ・ミッション

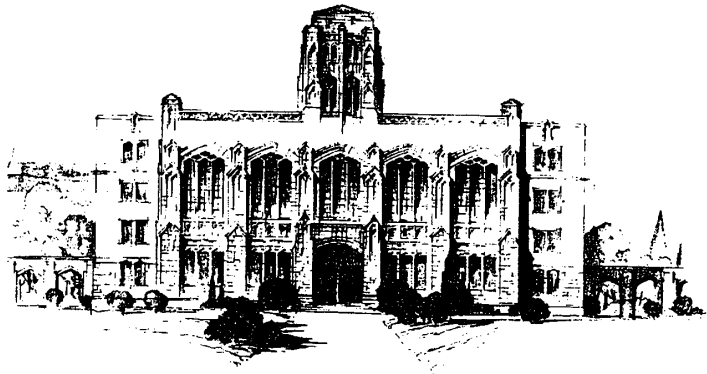
全体の意匠はスパニッシュ・ミッションの影響が見られる。そのことについてヴォーリズは従来のスタイルのどれもが「敷地や気候の必要条件」を満たさない中で、地中海様式だけがそれに適合する<sup>36)</sup>と記している。一方でこのスタイルが選択された理由について、デフォレストは「南地中海様式を少し変えたものが採用された。ゴシック様式だと10%高くつくことと、北緯35度の位置がより開けて明るい感じのスペイン・モロッコ風建物に合っていた」<sup>37)</sup>と記した。ヴォーリズは既にスパニッシュ・スタイルを、遡る大正12(1923)年の大阪のランバス女学校を嚆矢として、先述した昭和4(1929)年に完成の関西学院においても用いており、スパニッ





PROPOSED LIBRARY BUILDING FOR KOBE COLLEGE.  
W. M. VAUGHAN & CO. ARCHITECTS.  
 1911-1912.

図16 図書館のファサード試案1 (日本の天守閣風)



PROPOSED LIBRARY BUILDING FOR KOBE COLLEGE.  
W. M. VAUGHAN & CO. ARCHITECTS.  
 1911-1912.

図17 図書館のファサード試案2 (ゴシック風)

シュ・スタイルが日本において、ふさわしいスタイルのひとつと考えていたことが指摘できる。先にみたように先行した大蔵谷キャンパスにおいて、瀬戸内海を望む場所ということでスパニッシュ・スタイルこそがふさわしいとされた。ここで実現した岡田山キャンパスの外観デザインがこのことと関連があったのかについては定かではないが、施主である学校側になんらかの影響をおよぼしていたと考えるのが自然だろう。

図書館についてはヴォーリズはイタリア風と記した。図書館設計図については、日本の天守閣風(図16)とゴシック風(図17)のものの2枚の外観図が発見されている。前者は一階から二階にかけて、城の石垣が表現されており、明らかに日本の城郭を模したものになっていることが分かる。外観図2のものをみると、アーチの開口部の先端が尖り、柱型が表しになり、ゴシック風のスタイルである。この二つのものは試案と推測されるが、前者は外国人が考えた「日本」の建築表現であり、後者は学校建築の定番だったスタイルと捉えられる。ここからは現在



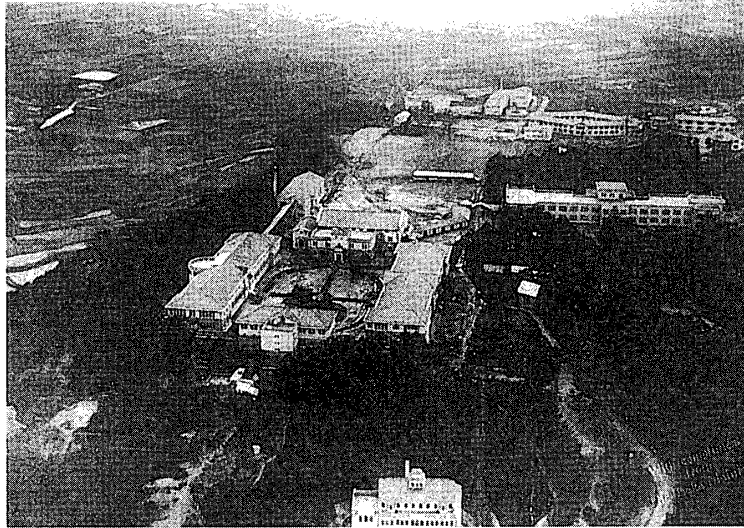


写真9 「空から見た岡田山キャンパス」(1933年)

の建築に至る段階までに、さまざまな試行がなされていたことがわかる。実際にはさらに多くの図面があったと考えられる。

## V ヴォーリズの建築作品のなかでの位置付け

### i) 実現したヴォーリズの理想

神戸女学院の学舎とは、ヴォーリズのなかではどのような位置にあったのだろうか。ヴォーリズは明治42(1909)年の広島女学院本館と校舎を嚆矢に、昭和39(1964)年に八十四歳で亡くなる数年前の昭和33(1958)年完成の国際キリスト教大学までに、膨大な数の設計をおこなっていた。

一般的に建築家にとって学校を設計するということは、個々の校舎の設計だけではなく、全体の配置を計画することがその上位にある。ヴォーリズは数多くの学校の設計に関わっているが、キャンパス計画まで手がけたものとしては、関西学院、神戸女学院がよく知られるが、それほど多いわけではない。また西南女学院をはじめ西南学院、福岡女学院、九州学院、広島女学院などについてもキャンパス計画がおこなわれていたが、ほぼ全校舎が一斉に完成するケースは少なく、そのような意味で神戸女学院はキャンパス計画と校舎の設計が同時になされた数少ない事例のひとつであったといえる。

そのことは昭和12(1937)年に刊行された『ヴォーリズ建築事務所作品集』<sup>38)</sup>(以下「作品集」と呼ぶ)のなかでの特別とも思える、神戸女学院校舎を重要視した取り扱いからも読み取れる。「作品集」によれば62件の建築が紹介されており、そのなかで学校としてはランバス女学院、関西学院大学、東洋英和女学校、加奈陀学校、梨花女子専門学校、西南女学院、プール高等女学校、アメリカンスクール、神戸女学院、豊郷小学校の10校が紹介されていた。前述したような240校のなかから、この10校が選ばれたのはおそらくはヴォーリズによって取捨選択された結果だと推察される。そのなかで神戸女学院には最多の10ページが割り当てられている。次ぐ梨花女子専門学校は6ページ、ほかの学校は1～2ページである。このように神戸女

学院だけ厚遇の扱いを受けたことから、ヴォーリスの自信作であったと判断できる。また、「作品集」に掲載の建物のなかで、15件のものについてコメントが記される。神戸女学院については次のような紹介文が添えられていた。

本建築は岡田山の傾斜地及山上を切開き自然に適合する様、建物を配置し、四周の風光を豊かに各所に取入れ、学校建築として総ての設備と共に、理想的代表建築の一つなり<sup>39)</sup>。

ここからはヴォーリスにとって、神戸女学院とはもっとも理想が適った建築であったことがわかる。キャンパス計画の観点からみても戦前期日本の学校が持ち得た、ひとつの到達点にあったと考えることができる。

一方、神戸女学院と同時期に設計された東京の東洋英和女学校については「経済的に学校建築としての美と堅実とを以って特長とせり」<sup>40)</sup>とあり、外観の建築スタイルについては共通点があるものの、建設コスト面では、対照的な内容であったことがわかる。

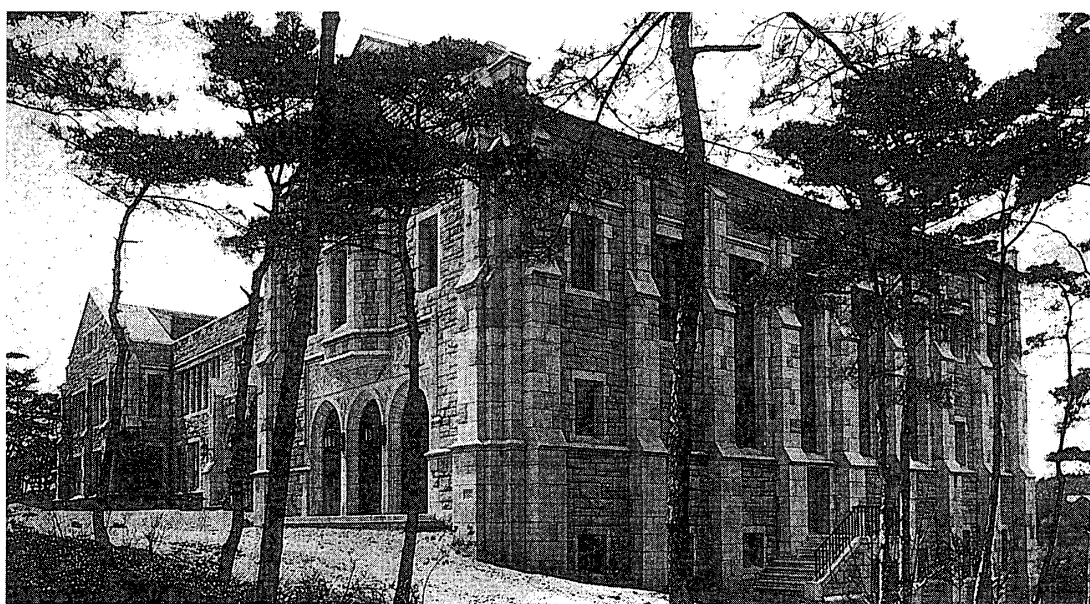


写真10 「梨花女子専門学校の音楽館」

次に昭和10（1935）年につくられる梨花女子専門学校をみると、音楽館が「校庭の雑音を避け、背面に四階建ての音楽練習室を取る様、傾斜地に建築せり」<sup>41)</sup>とある。その寄宿舍についてみれば、「自然の勾配を利用して山間に建築す」<sup>42)</sup>とある。ここに神戸女学院の音楽館の影響が見て取れる。

## ii) ヴォーリスの建築理念

ヴォーリスは学校建築について、校舎建築が生徒の精神経験に及ぼすということを主張<sup>43)</sup>しており、「学校とは教育的計画を収容する特別の機関」と捉えていた。

ヴォーリスが建築活動をおこなった時期は日本でも欧米の建築思潮と軌を同じくし、装飾を排除したモダンスタイルの建築が流行する。ヴォーリスはそのことについて、「一般に認めら

れ、又昔から用いられた種々の様式を合理的に採用して、その中庸的立場を守らん]<sup>44)</sup>という設計姿勢を採る。すなわち、あらゆるビルディング・タイプの建築から装飾を剥ぎ取り、単純なプランに還元するという、狭義の意味でのモダニズムの影響下にあったのではなく、目的に応じ、建築スタイルを使い分けるという従来どおりの建築家のスタンスを有した。

しかしながら時間軸でヴォーリズの建築作品を通覧すると、大正期は煉瓦造、昭和一桁代はスパニッシュ・スタイル、昭和10（1935）年以降は広義の意味でのモダニズムというように、そのスタイルは変容している。その背景には建築の使用に応じた目的による使い分けがおこなわれていたことに加え、「時代性」という逃れることのできない建築スタイルの流行による影響を無視できなかつたものと考えられる。

## 結

i 神戸女学院大学岡田山キャンパスの成立は諏訪山キャンパスの敷地狹隘を理由としたが、その背景には大正8（1919）年の専門部設置が関連する。すなわち高等教育機関にふさわしい校舎が必要とされたことに他ならない。大正後期から昭和戦前期は多くの私学が高等教育化をはかり、最初のキャンパス移転が東京や大阪、神戸でおこなわれた時期にあたり、そのような流れの一環にあったと位置づけることができる。

ii 岡田山キャンパス成立以前には大蔵谷キャンパス計画があつて、基本設計は完了していた。設計者マーフィはニューヨークを拠点とした建築家であつて、中国をはじめアジア一円で学校建築を手がけていた。日本で最初の郊外移転であつた立教大学のキャンパス計画をも担つた。大蔵谷キャンパス計画の特徴は地形を重視したプランニングであり、スタイルはスパニッシュ・ミッション・スタイルが提示されていた。瀬戸内海の気候が地中海と共通することを選択理由とした。それは岡田山で実現されたスパニッシュ・ミッション・スタイルと共通するが、最初はマーフィはより「日本」を意識した建築スタイルを提案していた。

iii 岡田山キャンパスはヴォーリズによる設計であつたが、二種類の配置図が作成されており、ひとつは大きく中庭を採り、北側に学生寮を南側に運動場を配するもの、もうひとつは現在のもので、南側に校舎部分、北側に学寮と運動場を配置したものだつた。後者の作成にあつては、以前にここに建設されていた旧尼崎藩主・桜井家別邸建築の配置や庭園に影響を受けたものであつた。

iv ヴォーリズはスパニッシュ・ミッションを校舎のスタイルの基調として完成させたが、当初はゴシックや日本の城郭風のスタイルのものも検討されていた。図書館を対象とした3種類の外観の試案から判明する。

v ヴォーリズの手がけた建築のなかでも、神戸女学院学舎はもっとも建築として満足のいく作品となつたといえる。その理由に、設計に対し最初から関与することができた点、学校側から信頼を得、ある程度まかせられるなど、自由度が高かつた点、工費に恵まれた点などを挙げることができる。

謝辞：神戸女学院大学非常勤講師・魚住香子氏、同非常勤講師・山内理恵氏、一粒社ヴォーリズ建築事務所元社長・石田忠範氏、同建築事務所・元所員小西太吉氏の各位には御教示を賜った。紙面を借りて深謝する次第である。

## 写真・図版出典一覧

- 写真1-(一) 大蔵谷キャンパス敷地の絵葉書(一)：社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会所蔵  
写真1-(二) 大蔵谷キャンパス敷地の絵葉書(二)：写真1-(一)と同じ  
写真1-(三) 大蔵谷キャンパス敷地の絵葉書(三)：写真1-(一)と同じ  
写真1-(四) 大蔵谷キャンパス敷地の絵葉書(四)：写真1-(一)と同じ  
写真2 マーフィの顔写真 出典は Jeffrey W. Cody, *Building in China—Henry K. Murphy's "Adaptive Architecture," 1914–1935*, The Chinese University Press University of Washington Press, 1999年  
写真3 Fukien (福建) キリスト教大学・敷地模型写真：神戸女学院史料室所蔵  
写真4 神戸女学院が来る以前の岡田山：神戸女学院大学図書館所蔵  
写真5 神戸女学院が来る以前の岡田山正門入口：写真4と同じ  
写真6 桜井邸離れ：写真4と同じ  
写真7 桜井邸主屋：写真4と同じ  
写真8 桜井邸正門：写真4と同じ  
写真9 空から見た岡田山キャンパス (大阪毎日新聞社撮影)：写真4と同じ  
写真10 梨花女子専門学校の音楽館 出典は『W・M・VORIES & COMPANY ARCHITECTS—ヴォーリズ建築事務所作品集—』城南書院、1937

- 図1 大蔵谷の地形図(1913年) 1万分の1  
図2 燕京大学女子部の倶楽部ハウスの正面図(1921年10月28日)：神戸女学院史料室所蔵  
図3 マーフィが関わった立教大学池袋キャンパス鳥瞰図(1914年)：立教大学図書館大学史資料室所蔵  
図4 大蔵谷キャンパスのスケッチ(1922年8月)：図2と同じ  
図5 大蔵谷キャンパス完成予想外観図・アカデミックグループ・見おろし(1923年7月)：図2と同じ  
図6 大蔵谷キャンパス完成予想外観図・アカデミックグループ・見上げ(1923年7月)：図2と同じ  
図7 大蔵谷キャンパス完成予想外観図・ドミトリイグループ(1923年7月)：図2と同じ  
図8 大蔵谷キャンパス配置図1(1922年9月)：図2と同じ  
図9 大蔵谷キャンパス配置図2(1923年8月20日)：図2と同じ  
図10 関西学院配置図(1928年)：一粒社ヴォーリズ建築事務所所蔵  
図11 神戸女学院以前の岡田山付近の地形図(1909年) 1万分の1  
図12 ヴォーリズ自筆の岡田山キャンパス配置図のスケッチ(1928年12月以前)：図10と同じ  
図13 岡田山最初のキャンパス配置図(1928年12月28日)：図10と同じ  
図14 実現された岡田山のキャンパス配置図(1930年11月)：図10と同じ  
図15 桜井邸の跡を示す配置図：図10と同じ  
図16 図書館のファサード試案1(日本の天守閣風)：図10と同じ  
図17 図書館のファサード試案2(ゴシック風)：図10と同じ

## 注

- 1) 一粒社ヴォーリズ建築事務所作成による作品リストの「教育」関連施設一覧による。ヴォーリズは昭和39(1964)年に八十四歳で亡くなるが、戦後は直接建築設計を担当することは少なかったという一粒社ヴォーリズ建築事務所元所員による証言が得られている。ここではその証言に準拠し、ヴォーリズが関わった建築を昭和20年までと仮定し算定した。その件数は199件あった。

- 2) 『神戸女学院八十年史』神戸女学院八十年史編集委員会、1955年
- 3) 山形政昭による博士論文『ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築をめぐる研究』1993年、や『ヴォーリズの建築』創元社、1989年、をはじめとする一連の研究があって、住宅や教会とならび学校も論じられる。
- 4) 小学校から大学までを取り扱った菅野誠による『日本の学校建築』文教ニュース社、1983年、をはじめ、明治後期の帝国大学や官立高等教育施設が取り扱われた宮本雅明による『日本の大学キャンパス成立史』九州大学出版会、1989年、東京帝国大学を対象とした岸田省吾による『大学の空間』鹿島出版会、1997年、がある。
- 5) 『日本におけるキリスト教学校教育の現状』基督教学校同盟、1961年
- 6) 『神戸女学院百年史総説』神戸女学院、1976年
- 7) 校舎のひとつである家斎館はヴォーリズによって1914年に設計された。
- 8) 明治初期に温泉が発見されることで、旅館や料亭が並ぶ遊楽地としての諏訪山が明治前期に成立する。そこでは歓楽地のような様態が展開され、教育環境として問題があった。
- 9) 「大学部敷地購入に至るまで」『めぐみ』臨時増刊、1921年12月
- 10) 「明石大蔵谷神戸女学院大学部敷地風景絵葉書」1921年11月
- 11) 前掲9)による。
- 12) 前掲2)による。
- 13) 立教大学を設計、詳しい経歴は判明しない。マーフィのことはJeffrey W. Cody『Building in China—Henry K. Murphy's "Adaptive Architecture," 1914-1935』The Chinese University Press University of Washington Press、に詳しく記述されている。
- 14) ハーバード大学の姉妹校のアメリカのミッションスクールで義和団事件の賠償金をもとにアメリカが北京の西郊に広大なキャンパスをつくった。現在は北京大学になる。
- 15) 詳細は不明だが、大蔵谷キャンパス計画に関する史料にある。
- 16) 「福建」とも考えられるが、詳しくは判明しない。
- 17) 坂本勝比古「建設に携わった建築家たち」『立教大学近代建築調査報告書』1983年
- 18) 前掲17)によると、ダナはエコール・ド・ボザールで建築を学んだアメリカ建築家学会(AIA)の会員であり、1908年よりマーフィと共同出資で建築事務所を開設する。立教大学鳥瞰図はダナの作成したものであった。
- 19) 堀勇良『外国人建築家の系譜』至文堂、2003年
- 20) 神戸女学院大学所蔵
- 21) チェコ人の建築家ヤン・レツルの設計した上智大学では、完成して間がない煉瓦造校舎の上階が瓦解したことに端的に窺えるように、関東大震災直後の大正末期から昭和戦前期には耐震という観点では非常に神経質になっていたという背景があった。
- 22) 『立教学院百二十五年史 図録』立教学院、2000年、に詳しい。ただし『立教学院百二十五年史 資料編第一巻』立教学院、1996年、によれば、外壁は煉瓦造であったが、柱や梁、スラブについてはカーン式鉄筋コンクリート造であった。
- 23) 神戸女学院大学史料室所蔵のデフォレスト文書による。魚住香子の翻訳である。
- 24) 『神戸女学院百年史総説』神戸女学院、1976年。
- 25) 仏教寺院風のものであった。その背景には中国では中国風のもものが相応しいスタイルとして中国側から望まれたという背景があった。
- 26) 前掲23)による。
- 27) 竹中工務店と関連の神戸農業振興会社が仲介の間に入っていた。この時期の土地値をみると、岡田山の土地は大蔵谷の土地に対して2倍近く高価であったから、二万一千坪竹中工務店は約10万円損をする。にもかかわらずこのような土地の手配をおこなった背景には敷地の交換の代わりに校舎施工を一式担当するといった交換条件が背景にはあったものと推測される。実際に総工費188万円が竹中工務店側に支払われており、そのような意味では竹中工務店側では十分に採算が採れたものとみられる。

- 28) デフォレスト文書による。加えて在米神戸女学院財団の推薦によるものがあった。
- 29) 一粒社大阪本社事務所所蔵
- 30) 大阪芸術大学所蔵
- 31) 中世ヨーロッパの城塞における建物配置法に端を発するプランニングである。
- 32) 神戸女学院が移転する少し前の大正10（1921）年に刊行された『武庫郡誌』には、この別邸のことは記されておらず、岡田山が所在した大社村広田およびに甲東村門戸のなかの項でも記載はない。
- 33) 前掲2) と同じ。
- 34) 前掲20) と同じ。
- 35) 渡辺久雄「ヴォーリズ博士と竹中藤右衛門氏」『学院史料』Vol 2 1984.3 神戸女学院史料室
- 36) 前掲23) と同じ。
- 37) 前掲23) と同じ。
- 38) 城南書院、1937
- 39) 前掲38) と同じ。
- 40) 前掲38) と同じ。
- 41) 前掲38) と同じ。
- 42) 前掲38) と同じ。
- 43) Voriez「The Architects' Statement」『ジャパン・アドヴァタイザー』「神戸女学院特集号」1934. 2月11日号附録（『学院史料』Vol 2 に所収）
- 44) 前掲38) と同じ。

（原稿受理 2004年3月31日）